

【作文・中学生の部】

「土砂災害への備え」

多賀町立多賀中学校 3年 ^{ふかお}深尾 ^{さとし}理史

私は、この夏九州を襲った非常に激しい雨によって心配されている、土砂災害に興味をもった。土砂災害とは具体的にどんなものなのか、そんなに危険なものなのか、など様々な疑問がわいてきた。そこで私はインターネットを使い、土砂災害に関する様々なことを調べた。

そもそも土砂災害とは、集中豪雨および台風などを原因(誘因)として発生する「土石流」「地すべり」「がけ崩れ」を指すそうだ。私は動画でこれらの災害を見たが、どれもこれも危険の極みだと言っている。それくらいすさまじい映像だった。

日本での土石流の発生数は年間500~2,000箇所と多く、死者も10人前後だという。海外では、日本と同様に急峻な国土をもつ、インドネシア・ネパールなどでも多数発生しており、年間1,000人程度の死者を出すこともある。日本の技術支援により対策が進められている。発生数と死者が予想以上に多かったので、びっくりした。

また、もう一つ驚いたことがある。それは「土砂災害には前兆がある場合がある」ということだ。「山の斜面に亀裂が入る」「湧き水が止まる、または普段とちがうところから出てくる」「川の水が急に減る」「山鳴りや地響きのような異常な音がする」など、色々あるらしい。

昭和57年に奈良県五條市で起きた地すべり災害では、発生の8時間も前に消防団員たちが異常な音を聞いていた。その音は2~3分間続いたそうだ。これを受けて地区全員が事前に避難をして、大規模な地すべりが起きたにもかかわらず、ひとりのけが人も出なかった。

また、江戸末期の1860年に長崎市郊外の山川河内地区では、土石流が起きて32人が犠牲になった。搜索を打ち切って犠牲者に饅頭を捧げて供養をしたのが4月の14日。それ以来、なんと150年間、災害を忘れないように当番の人が毎月14日に饅頭を配る習慣が続けられてきた。

この地区では、雨の降り方や川の水の量の目安を決めて、少しでも危なかったら安全な場所に身を寄せることを徹底している。ひとり暮らしのお年寄りなどは、大雨が予想されると、前日から安全な親戚の家に避難している。昭和57年の長崎豪雨のときも、土石流で2軒が流されたがひとりの犠牲者も出さなかった。

土砂災害の危険箇所は全国に525,000箇所あるので、いつかどこかで起こってしまうし、仕方がないことだ。しかし、予防や対策をすることで被害を防いだり、少なくしたりすることができるはずだ。前述の二つの事例のように。

去年の3月11日に起こった東日本大震災の影響で、東北や関東では地盤が弱くなっ

っているとニュースで耳にした。私の住んでいる所は近畿だが、山のそばなので油断はできない。そこで私は自分なりの予防・対策を2つしている。

1つ目は、テレビやラジオなどで防災情報を把握することだ。さすがに雨が降りそうにないときはそこまでしないが、梅雨のときなどは特に注意している。

2つ目は、ラジオ・懐中電灯・非常食などが入ったリュックを分かりやすいところに置いてあることだ。こうすることで、もし近くで土砂災害が起こり、一刻も早く避難しなければならないときに便利だ。

こういった心がけは、自分の命を守るためにとても重要だと思う。また、家族や友達、地域の人たちとの関わりも、お互い支え合う上で大切だ。となると、これからの私たちの課題が見えてくるはずだ。人間関係を大切にしよう。それが土砂災害への最大の備えになるのだから。